



Murata High School 100th Anniversary

百年通信

No.4 2024, 7, 8 発行

創立100周年記念実行委員会

全日制課程開校式 1964(昭和39).4.7



県立移管 新校章・校歌制定 1966.4.1

村田町長・村田町議会議長 1963.7.8

「村田高等学校を全日制にされるについての請願」

村田町長 1963.9.10

「全日制課程設置許可の申請書」



宮城県教育長(教育長室にて) 1963.1.27

➔ 町長と校長へ 全日制課程認可の内示

全日制課程開校式(小学校講堂) 1963.4.7

➔ 生徒総数 344名 職員 27名

全日制課程の設置

職員・生徒・町・町民の10年にわたる夢の実現

式典は「設置式」ではなく「開校式」の名で挙行

関係者にとっては、新しい学校の「開校」であった



県立移管運動



宮城県議会で県立移管案が可決

1965年12月.23日午後6時

山は動き、現在へとつながる

1966.4.1 県立移管 新校章・新校歌 制定

全日制開校と共に新校地高森山に移転し、着々と施設設備の充実を図り、1966.4.1より県立村田高等学校として再発足した。

この機会に心機一転、新校章と新校歌を制定し、古き良き伝統の上に、さらに新時代に即した校風を築きあげ、一台躍進を図らんとするものである。

県立昇格記念式典 並びに
校舎建築総合落成式 1966.4.28

【県立移管促進期成同盟】結成

委員長:町長

委員:父母教師会役員・教育振興会役員・同窓会役員

◇ 県教育委員会へ度重なる「請願書」の提出

◇ 土地買収・学校施設建設費の村田町負担・高校負担

(高校の負担金は地元企業・隣接町村・篤志家の寄付金,父母教師会の醸出金)

請願理由

- (1) 地元に県立高校が無いために、高額な学費や下宿料をかけて他の県立高校に通学させている家庭が多い
- (2) 学区内の高等学校全日制課程入学志願者が増加している
- (3) 全日制課程設置により、隣接市町村から本校への志願者が増えている
- (4) 本校は交通至便のため川崎町・蔵王町等から県立移管が期待されている
- (5) 施設・設備を年度計画を立てて実施している

県立移管時の松山校長先生の言葉

「本校の特色には、まず善行運動をあげたい。この善行運動は私が校長に着任して早々善行ぐるみの運動として展開するよう提唱したものであって、校長の信条を具現するための一方策である。その精神は善人育成をねらいとするものであって、換言すれば善人運動である。」

(『雑木』13・14合併号より)



金谷の丘に立つ、町民が土地を得、作り上げた二階建ての新しい校舎は、町民の教育に対する希望と意志の結晶であり、町の文化のシンボルであり、誇りでもあった。

村田高校 褒賞規定



Ⅰ 善行賞 校内外を問わず善行をなし、生徒の模範となる者に与える。



≪ 新校歌は、松山校長先生自らの作詞である ≫



町民あげての《全日制課程設置・県立移管》運動が実を結んだ 村田高校

全日制課程が設置された頃

1964(昭和39)年度 在職教員 談

世の中はオリンピック景気と浮かれていたが、村田高校はそんな順調なものではなかった。現所在地金谷の新校舎建築、そして移転、更にそれに付随する校舎・施設の建設、そして全日制課程新設等々。こういう数々の大事業を短期間で成し得たのは、村田高校の存続が危がまれる危機感があったからだろう。本当に町当局も、よくいろいろご援助ご協力くださったものだと思う。

1966年度、待望の県立移管。やっとこれで他の高校と同じようになっただろうと思った。本当に、この頃の生徒は苦勞して、大変だったと思う。朝から授業をせずに校地・グラウンド整地作業、その他の作業もせざるをえなかった。教職員も大変で、慣れない肉体労働を生徒と一緒にやった。保護者も連日のように奉仕作業に来てくれた。教室での勉強は不十分であったが、青空の下で教師、保護者、生徒一体となって協力し合い作業をしたことは、何よりも生きた教育ではなかったか、と今考えている。

トピック 授業料(年額)・入学者選 hands 手数料

- 1964(昭和39) 全日制:7,200円・250円
定時制昼間部:3,600円・120円
夜間部:3,000円・120円
- 2024(令和6) 全日制:118,800円・2,200円

1964年と2024年を比較すると授業料は16.5倍、入学者選 hands 手数料は8.8倍に上がっている。この間の消費者物価指数の上昇は、おおよそ5倍である。

県立移管当時の思い出

1966(昭和41)年度 新任教員 談

新任教員として村田高校に赴任した1966年4月は、町立から県立へ移管された年でした。

1967年度になると、松山校長先生の「これからの社会は車時代になり、男女を問わず運転免許が必要になる」という強い信念と熱意から、自動車運転練習場コースづくりが始まりました。コースづくりは、数人の作業員と先生方、生徒たちが一致協力して行いました。校庭整備以上のきつい作業で、放課後・空き時間、夏季休業を返上して、玉石コンクリート合せ、一輪車で運搬と真夏の太陽の下で汗とセメントまみれの奉仕作業でした。生徒たちは学校生活に励み、ただひたすら良い学校にするために協力したのです。

いよいよ運転練習をカリキュラムに取り入れて、放課後の特訓が開始され、一般の方も受け入れて練習を行うようになりました。また、県自動車運転免許試験場のはからいにより、本校のコースで出張試験を行ってもらい、多数の生徒・先生方、一般の方々が免許を取得したものです。その数年後、免許取得の条件に路上運転が加えられ免許取得が難しくなり、練習ができなくなってしまいました。

高校進学率のさらなる高まりによる学級増に対応し、特色のある学校にしようと1968年度から自動車科が新設されました。実習場も教材等も無く、年次計画で実習場が建てられ、実習時間には教材づくりに専念したものです。こうして県立高校としての第一歩を踏み出したのでした。

「遊撃手」について (内田より)

『いすゞ ジェミニ (1.5L ディーゼルトーボ) 特別仕様車【フライトスプリング・ジェミニ】』は、いい車であった。軽油が1ℓ=¥65ほどの頃、燃費は23km/ℓ、ディーゼルながらターボの力で気持ちよく運転できた。あまりの軽快さに、安く済んでいた燃料費をはるかに超える金額を国庫に納めたことも何回かあった。「いすゞ」は「117クーペ」等、魅力的な車を生産していたメーカーで、「ジェミニ」のキャッチコピーは「街の遊撃手」。アクロバティックなCMも評判になっており、高校球児の頃、本当は遊撃手になりたかったウチダが「ジェミニ」を購入したのは必然であった。(High School Question: 宮城県で一番古い(伝統ある)高校は? Answer: _____ 高校)

カメラは、フィルム時代の頃からC社N社ではなく、野外での遊撃的撮影に適した「ペンタックス」一筋だ。手軽に使えたフィルム時代のMZ-3は名機であり、デジタルになっても、もちろん「ペンタックス」である。愛機は『K-3 Premium Silver Edition』。購入後、革製オリジナルバック(5万円相当)のプレゼントキャンペーンに「ペンタックス愛」をしたため応募したところ、見事に当選させてくれた。話の分かる、いいブランドである。

野球用品は「ZETT」にこだわった。クラブは遊撃手用で、三塁手だったウチダの大きくない手にフィットし、三塁線は開かずの扉のごとく破らせなかったが、三遊間は何故かよく弾いた。vs OO高戦の最終回、三遊間にとんだゴロにキャプテンのウチダは素早く反応したが、四球の多いエースに「ショートにまかせろ！」と叫ばれ、動きを制された。自分史年表に深く刻み込まれた『1979 評定河原の屈辱』だ。もちろん、「ZETT」のクラブは悪くなく、悪いのは(A:ウチダ B:キャプテンを信頼していないエース A or B?)である。

さて、生徒諸君。上記の三社は、厳しい道のりではあったが、トップメーカーと差別化した技術により企業・ブランドとして生き残り、製品市場で一定のシェアをもっている。光る何か、評価される何かがあれば、トップにならなくとも、社会や属している集団の中で、必要で欠かすことのできない存在になれるのだ。その何か(何も目立つものだけでなく、地道に継続して頑張れるとか)を見つけ、自分を成長させるために高校生活がある。